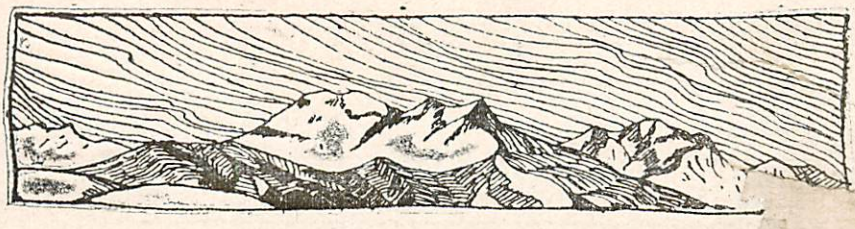
山とスキー

第十號

大正拾年六月七日第三種郵便物認可大正拾年十二月十四日印刷同年十二月十五日發行



第拾號目次

□記　事□

アツプローウチに就て …… 廣田戸七郎（1）
九時の悲 …… 上原長十郎（5）
札幌附近の地形學的考察 …… 夏間生（9）
雪の信飛連山ミスキー …… 板倉勝宜（14）
本邦に於けるスキーの團体（二）…… （20）

□圖　版□

スキージヤムプ臺 …… （13）
十勝岳頂上にて …… 六鹿一彦（16）
雪の針葉樹林 …… 中野誠一（21）

會告

質疑應答

スキーを研究しよふミする人の爲に特に適當な指導者を得難い地方の人々の爲に、スキー乃至冬期登山法に關する質疑に應答するこミに致しました。返信料封入の上御問合せ下されば、本會の知れる限りに於て喜んで御答へ致します。

本誌代價

一部定價　金三十錢（郵送料　五厘）

六ヶ月分（自第十號至第十五號）　金壹圓八拾錢（送料不要）

スキージャムプの研究

アップローチに就て

廣田戸七郎

ジャムピングのスタートから飛臺（シャンツェ）までの部分を英語では Approach, と云ひ、獨逸語では Anlauf と云ふ。さて之等に關する詞の邦譯を見ると前者には接近とか迫る事とかといふ要するに接近するといふ意が主に用ひられ、後者には駈け出しとか準備、用意とかといふ意があり、割合に後者の方が飛躍にふさわしい、氣分を表はさして居る樣に思はれる殊に Anlaufsprung と書いて「駈け出しの飛躍」といふ譯がある樣である。で自分はこの意味で、普通ランニングなどで使用する所謂走り出しのことを駈け出しといふ樣に用ひる意ではなくして、凡て飛臺までの準備動作をひつくるめて、駈け出しといふ意を採用したいと思ふ。で自分は爾後便宜上この駈け出しといふ譯語によつて飛臺までの姿勢及び斜面の狀況について述べることとする。之は便宜上の譯語であるからよりよい譯語があつたらそれに從ふこととする。

駈け出しの斜面全体について云ふならば、距離は普通時即ち練習の時には、約三十米から四十米位あつたら十分であらう。そして斜面の角度も七度位からだん〴〵急になり、最も急なところで二十度位あつて飛臺のところで五度位の角度があつたら宜しからう。尤も割合に飛臺の高さを高くして長距離の飛躍を目的とするクリスチアニアジャムプ型では斜面の角度は緩かにする爲めに、從つて斜面の滑る距離は長くなるが、之に反して、飛

臺の高さは低くて長距離の飛躍を目的とするテレマークジヤムプ型では原則として斜面の角度は急にして、滑る距離は短くなつて居る。で今自分はこの二者の利害は何れ後述することとして此處では單に斯うした二つの異つた型の證介に止めて置くことする。

次に斜面の巾は之も練習時なら三米か四米位もあつたら上々であらう。

是等も競技の場合になると、他人が滑走した走路(コース)を一々一回互に直す必要のない樣に、或時間を隔てて素早くどんどん續けて滑つて行ける樣に、さうして各人が各々自分の新しい走路で滑走することが出來る樣にする爲に、斜面の中も飛臺の中も四米半位から六米位にもなる樣である。レコード本位の斜面の構造は第八號の郡場博士の米國に於けるスキージヤムピングの設備を參照して貰ひ度い。

今この駈け出しの斜面を飛臺から約二十米位のところまでを駈け出しの下方部とし、それ以上の部分を上方部として、この兩部分について精しく述べて見樣と思ふ。

駈け出しの上方部の斜面に於ては、要するに斜面が急で且つ適當な速度を出し得る丈の充分の距離さへあるならば殆んど大したことはないが、それでも大なる、そして急に体に不平均を生ずる樣な原因となるものがあるならば相當修正しなくてはならない。それから斜面の踏み固めはこの部分では左程堅く踏み固める必要はいらぬと思はれる。

次に下方部は非常に大切で、この部分はスキージヤムピングの大部分の生命が含まれて居ると考へられる。この飛臺から二十米位上方の距離の内では、瘤とか、土塊の堆積とか、即ち少しでも体に動搖を與へる原因となるべき點があつては甚だ危險と思はれる。

勿論上述の駈け出しの上方部と、この下方部との斜面はよく結着して居らぬといけない。つまり斜面が一樣であれば飛躍者が飛臺に達した時に、確實に、愉快に滑り出す事が出來ると思はれる。夫れでも飛躍が微妙である丈に仲々いろ〳〵の事情で、体を完全に、安全に平均よく、進めることは難しいものである。それからこの下方部の最後の九米乃至八米の勾配は、絶對的に平たいものでなくて、上方部では得たる速度を繼續し得る樣に作られねばならぬ。そして斜面は十二分に踏み固められねばならぬ。

斜面に關することはこれ位にして、次に駈け出しに於てとるべき体の姿勢に關する階梯を述べて見る事にする。

先づスタート、之の出方にも跳躍廻轉を利用して即ち飛躍者が飛臺の上方斜面に於て、スキーの位置を斜面の等高線に平行にして、飛躍滑降開始の爲に、その位置で正しく直角の跳躍廻轉を行ふて飛臺の方に向ひ、同時に滑り出す方法と複杖を斜面に突き刺し、之によつて体を支へ、スキーを斜面の下方、飛臺の方に向けた後に、体を支へて居た杖を離して出發する方法と、上が平滑でスキーを穿いたま

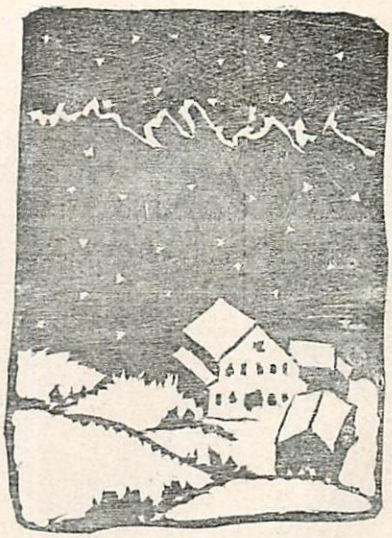
ま飛臺の方向に向つて居て、滑り出す場合などいろ〳〵ある。この内第一の跳躍廻轉を利用するのは、熟練なやり方であるかも知れぬが、然し余り感心した方法とも考へられぬ。實際始めからさう熟練な事をやれるものではない。自分は初歩者の爲に用心深い方法として幼稚乍ら第二の方法即ち複杖を使用する方法をおすすめする。第三の方法は論ずる外でもあるまい。

さて是等何れかの方法によるものとして、出發點に立つたなら、脚の自由のきく範圍で、締具(ビンディング)をしつかり締めて、斜面に凸凹がないか、速度を加へる原因となるべき雪がスキーの裏について居らぬかといふ事に注意して、心を落付けて、腦中でよく何處でどうゆう姿勢に移り、飛躍のときにどう飛臺を離れて空中で如何なる事をして体の平均を保つか、尙自分が何回もの練習によつて知り得たる自分の缺點を矯正する樣にして、そして必ず飛んで立つといふ覺悟を以て、精神が穩かになつたら、輕快に滑走し出す。最初は直滑降(クラウチングダウン)の姿勢で滑つて、十四米位のところに來たら、屈身姿勢に移る。この姿勢は除々に低くして行つた方が宜しい餘り最後の踏み切りまで腰の高い姿勢は体の平均を失ひ易くて損ぢやなからうかと思はれる。

覺屈身姿勢(クラウチングダウン)は即ち兩足を全く平行か、殆んど平行位に揃へて、兩腕の先は夫々兩足のクロブシのところにつく位にして、そして体の重みは兩脚の裏の膨(ボール)みの間に平均に載せるのである。屈身姿勢に移つてから十一、二米來た時、即ち飛臺の端から二米乃至三米位のところに來た時に、兩腕を心持ち後方に引いて、間もなく体と腕を同時に前方に投げ出して、体の重みを腰に載せるのであるが、然し決して体をそらしてはいけない。そして同時に眞すぐに飛臺から空中に滑り出るのである。この瞬間動作をといふのである。

この SALTS については次章に於て論ずることとする。駈け出しはこの SALTS までの間で、飛臺の作り方によつて姿勢も從つて變つて行かねばならない。

私は駈け出し(アップローチ)では体の平均を保つ事と必ず立つといふ覺悟を以て滑ることの必要を再言して擱筆することとする。



九時の悲

山崎孝一君死体捜索顚末

上原長十郎

その晩、山崎さんは寢てゐて考へられました。しばしば宿の主人や其他から聞てゐた話しによると東京の帝國大學の人達が、あの極寒に標高二千有餘メートルの高峯を何の苦もなく、一度ならず二度までも越ゑて、あの草津と云ふ温泉へ、そのスキー旅行を伸ばされたと云ふ話。兎に角、自分も北の國では可なり自信を持つてゐる。加之、こゝの峠の氣候、雪質は二三日來の踏査によると少しも故郷の狀態と變らない。まして峠は七里、それも四里登れば、あとは三里はじつとしてゐてもあの、まだ見ぬ世界的に著名な草津の濛々たる湯煙の中へ溶け入る樣な氣分に、ひたる事が出來る。そこにはまだ、そればかりではない。最も親しむ可きスキー家が大勢滑走を毎日續けてゐるだろう。（温泉にはスキーはなかつた。）不意に自分がこの峠を突破したらそれこそどんなに草津のスキーフワンを驚かすだろうと。そうしてその夜はまんじりともせずに夜の明け放たれる頃をひたすら待つてゐたでせう。宿の下男が朝の水をくむ音の凍つたのにふと目を覺した君はそつと起きて寢卷の襟をかき合せ乍ら廊下に出て、欄干から希望に滿ちた草津峠を仰いだ時、そこには一點の雲もなく、風もなくほんとうに御足跡を印するのを待つてゐるかの樣に見ゑた。

朝日は雪に反映してちら〳〵と雀の聲も身を引しめて、その用意もそこそこに毎日の練習の姿のまゝで宿を出た。出掛けに宿の主人は辨當を手渡しつゝ、草津峠は危險であるから必ず越してはなりませんよ。と吳れぐれも云ひ含めたが昨晩、圍爐の側でその抱負を語つて母上にもまた宿の主人にも止められてゐたのに、それならひとりで誰にも話さずに行つて來やうとたゞ、はいはいとのみで出かけたのでした。その時刻が宿の主人が何氣なく時計を振りあふいだら、午前九時を少し、廻つてゐたさうです。

暫くすると屏風岩の絶壁の下に小さな小さな黑ソフトを頭に詰襟の學生服、腰には握り飯を凡そ二つと思ふ程、風呂敷に包んでぶら提げた輕裝のスキーヤーが、ぽつりぽつりと行手のせまる樣な山に登つて行くのを見出しました。草津街道はその頃、すつかり雪にうめられてはゐたが冬仕事に山から材木を採り出す人達の足跡があつたので、それをたよりに唯々、頂上を目當に一心に登攀を續けてゐました。……と一寸立止つたとき（その時君は山の左の谷の頭に出てゐました。）行手に小さな家屋が點々として散在してゐるのを見出しました。君はごなに喜んだでせう。遠い路を苦しい思ひを續けてやつと草津へ行つた人達に比べると、自分は何の苦もなくもうすでに、その道程の半ばを登つてあとは下降するだけであると。

嗚呼。何たる危險事であつたろう。君の眼に映じたものはそれは君が豫て憧憬してゐた草津温泉ではなかつたのでした。それは草津から二里も三里も山の奥に入つた入山と云ふ百姓家が見いたのでした。惡魔の戯はまだそれだけではありません。今迄よかつた空は、一面の灰色と變り風まで少しづゝ加はつて來てしまつたのでした。危險は刻一刻と君の身邊を包圍して來ました。けれども君は少しも覺えなかつた事でせう。天候の惡變に急にそのスキーを彼の點在する家の方面へ廻し滑走を始めたのです。

吾妻川の上流は、それでも仲々、水量が多く、君が滑降しては登り、登つては下る谷々の水は、滔々として、それを渡るには一寸首をひねらす程の間隙を持つてゐた爲に暫くの間、溪流に沿つて下つて來たところ、丁度ジャムプで飛越す程の峽谷を見出したので一端右手の山に登り、そこから一息にその谷を易々と跳越えてしまはれました。そうこうしてゐるうちに、太陽は沒してしまつた。寒さは刻々と加はつて來る。吹雪は日暮れて尙一層、烈しく、先に峠で見た點々とした家根は吹雪の爲、皆目知れなくなつてしまつた。噫、萬事窮す。そこであせりにあせつた君は、スキー滑降の暗中を行くは危險な事を慮つて、そこにスキーを脱ぎ捨て、それより徒歩にて雪の上を目當てと思ふ方向を指して一生懸命、足を運ばせたのでした。けれども、けれども、朝、握飯二つを持つたのみの君は、空腹を覺にると同時に防寒用意もおこたつてゐた事とて、寒氣をひしひ

しと感じて來たので、もう殆んど無我無中で、もだにました。ところが闇の中に、また一つの溪谷に出てしまつたのでした。あゝもう絶對絶命、この川を、しかも此の寒い夜どうして越されようか。越せばその水の爲に凍にてしまはなければならないし、越さねば懷しい草津（まだ其時君は草津と思つてゐられたらしい。それはあゝの君の動作から推して察せられる。）に着けない……と。そこで勇にして敢なる君はその單軀をざんぶりとばかり水中になげ入れ、辛うじて彼岸に到達した。然し夜は既に更けてゐる。寒氣は寒氣ではなくなつてしまつた。身体は疲れる、腹は空く手足の先はもう知覺を失つてしまつたのでした。その時まさに九時。（それは君の腕時計が水中に入つた時水の爲めに凍り止まつてしまつたので後で考てることが出來ます。）朝、宿を出てより十二時間。それでも未だまだ草津はどこだか解らない。嚴寒の山中、氷雪の上にもうどうすることも出來ず、身体をうづくめた君は、そこにもう何も考へられなく、知らぬ間に眠つてしまはれました。あゝ、天は是か非か。吾が敬愛する山崎孝一君はかくして永遠の眠から覺むる時はなくなつてしまつたのである。

場所は草津温泉を去る三里。入山村字小倉の農家を去るこゝ二町の地點に哀れにも悲しいむくろは横はつてしまつた。

生前君の希望によつて君は死骸となつて、こひにこがれた草津に入る事となつたのである。聞者誰か目を掩はないものがあるだろふ。草津の町民は君の死にどんなに感動した事であろふ。何處の家へ行つても皆んなその話しに空氣を濕らしてゐました。

草津郊外一洙の煙りはあの勇敢なる北國の勇士山崎孝一君の骸の變じたものであつた。而し君の遺績は永遠に吾々の頭離を去る可くもあらず、日本スキー史には君の死を大なる犧牲として全國スキーヤーに警告を發するだろふ。

かくして山崎孝一君の一生は生國を去る二百里の山中に於て終局を告げたのである。噫。

死体捜索の顚末

澁温泉にてはその日、卽ち三月十七日津播屋旅館主人は山崎君の歸館の餘りに遲いので種々心配をしたるも日頃、草津へ、草津へゝ口癖の樣に云つてゐたし、昨夜も圍爐端で話しが出たのであるから、きつと草津温泉へ越された事と思ひ、そのうち着電が來る事ゝ考へてゐました。その時君の母上には非常に心配されて胸にたゞならぬ或何物かの豫感を覺にたゝ言はれました。そうして一夜中眠りもならずいまに着いたゝ電報があるか、外の足音は電報配達ぢやないかと遂々夜をあかしてしまつたのでした。それでも何の電報もないので一應、君の行手を調べる事を議決し、宿の番頭其他にて、スキー痕を何處までもどこまでもたどつ

た所、峯へかゝるところまで見たのに、それより峯へ向つて登つた跡が歴然としてゐるのに安心して、必ず草津へ行かれた事と引かえし（それは翌十八日）草津スキー倶樂部宛にその旨初めて電報がありました。そのとき（午後六時）私は丁度倶樂部員の二三と數日のスキー視察旅行から歸つて靴の紐を解こうとしてゐると、倶樂部の事務を一切引受けてゐる私の所へ電報があつたのでした。それには只「昨日學生一人が貴地へ向けてスキーで行つた筈だから町内の旅館を調べてその在否を至急報で知らして呉れ」と云ふ意味の電文でしたので、私はそれより直ちに湯にも入らず旅行の姿のまゝで幹事長山本與平次氏宅におもむきその通達紙を示したる上山本氏と二人で町内六十有餘の旅館をくまなく探したれど、それらしい人を見出す事を得なかつた爲、至急幹事會を召集しました。その結果として澁温泉津播屋旅館へその旨返電をし、明日は全部捜索に出す事と決し、その夜の内に、各倶樂部員へ急報し、明日の捜索準備を命じました。

明くれば十九日、吾々は當然の順序として澁温泉へ向ふ峠へと志し、倶樂部員の全部を登攀せしめ、草津を去る三里の地點の森林中に假休息所を設け焚火をして、それより一里の地點以内を、各溪谷共に探索をつゞけ午後二時迄、そこに足を止めたれど、すこしもこゝまで（芳ケ平）來たる形跡がないので一端、引上げたる上、その旨、又々澁へ向けて電報しました。澁温泉では、この日は當倶樂部の吉報をのみひたすら頼みに待つてゐたのでしたが、斯樣な次第故、止むなく今度は根本的の大捜索を開始しやうと次日即ち廿日に津播屋旅館主人は番頭を先頭として十數人の人夫に食糧品を用意をさせ山崎君のスキー痕を初めから、痕痕と宛然網をたぐる如くにして探ねたる結果前記の地點に横死せられてゐる事を發見し直ちに草津スキー倶樂部に人夫を派し、その應援を經て、草津山光泉寺の一室に横臥させる事とはなつたのであります。

その時スキーは君の体を去る約一里の地點にスキーをその下面と下面を合せ、締革にてきちんと締め、雪の上にさしてあつたと云ふ話し、如何に君が沈着であつたかと云ふ事を表はしてゐるこでせう。

紀念の爲め、君の体をそこまで運んだスキーは當倶樂部に保存する事を慈母より申込まれたのです。

札幌附近の地形學的考察

夏間生

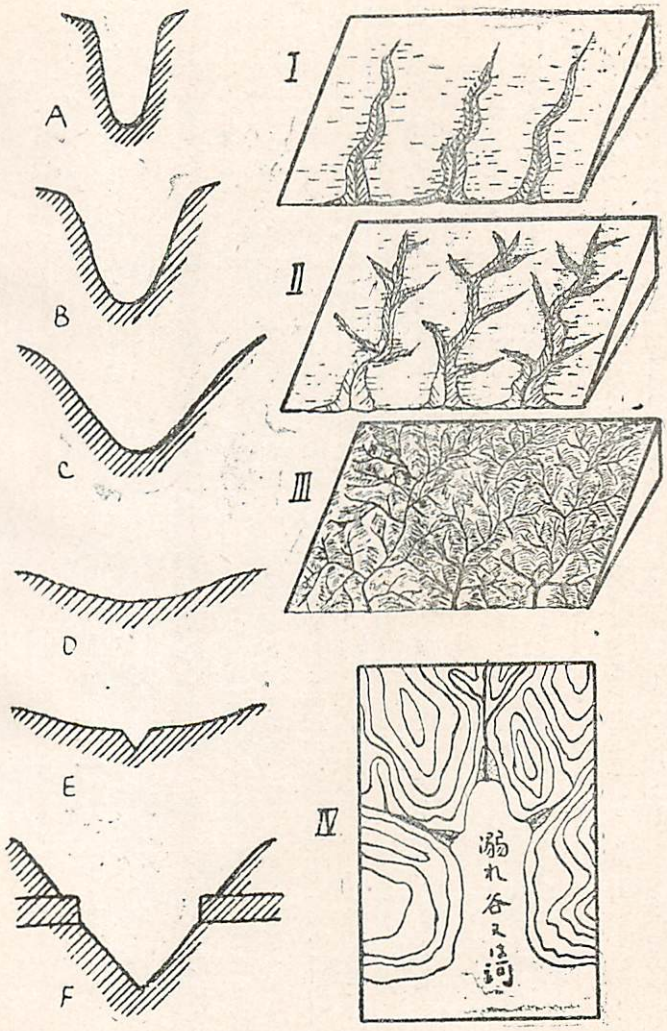
概述　北海道は日本の寶庫として政府及び實業家が此の開發に努力し調査をなした事は多いけれども、此を學術的趣味上より考察したものは少ない。私が初めて北海道に來てより今日に至る迄約二年ではあるけれども、北海道が地形學上に日本本土に見る事の出來ない山岳及河川の形、平原の樣子がある事を發見し非常に北海道に執着の念がある。何日かは北海道の山野を跋渉して其の地形學的の記錄を作つて見たいと思つて居る。其の第一歩として札幌附近の地形を考察して次第に各方面を研究したいと思ふ。

此の記事はあまりに學術的にかたむかない樣にして、先づ河や山の觀察の仕方及び考へ方を讀者に知らしめた上で札幌附近を如何に解譯するかと言ふ事にしたいと思ふ。初めおことはりしておき度い事は地形學を專問にやつた者でないから專問家から見れば非常に不備の點が多い事と信じますから御氣付の點があれば御知らせを願いたい。

河及河の或因　一般に山岳に趣味を有し山を話す人は河に關しては割合に無頓着である樣に思はれるが、河は山岳の形を作り上げる大切な鑿であり鋸である。

河の變遷と活動が山岳の外觀に大いに影響を與へて居る事は、山岳の壯觀が溪流の美によつて保たれて居る事によつても知り得るのである。河の流れは地上に落ちた一滴の水より初まり最後に大河をなして大海に注ぐものである。此の地上に落た水は普通の山地では三割乃至四割平地で三歩乃至四歩は地表を流れ去るけれども他は全部地中に浸込んで地下水となる。此の水は泉又は自然噴水となつて再び地表を流れるものである。

河の作用は一般に良く知れて居る通りに破壞作用と建設作用とがある。私は今、重に破壞作用の事を述べて、地表が如何に河によつて彫刻せられて行くかを示したい。一体河は上流では大地へ深く深く切込みたいと務め、下流では


A
B
C
D
E
F
I
II
III
IV
溺れ谷又は河

側面に破壊をしたいとして居る。此の事は上流では水は自己の重量によつて下方に移動をなすべく務める爲め、其の地方の岩石の强弱に關係せず普通は直線に近いが、下流になれば水の自己の重力により下方に移動する力は、土地が平坦の爲め弱くなつて、其の地方の岩石の構造に支配せられて小さな石の塊にでも其の進路をさまたげられて、曲折した流路を取るものである。今の樣な斜面に河が生ずる場合に土地が均一質に近き物からなり其の土地が上昇も下降もしないと假定すると、１２３圖に示す樣な段梯を以て變化するものである。

第三圖が次第に河川の浸蝕を受けると、最後には殆んど平面に近い土地と變じて僅に其の地方は波狀の小凸凹を示すのみである。

此の如く河川の浸蝕するに伴ひ、其の河川が有する兩岸の形は各々異なり圖ＡＢＣＤの如く變化して名稱を異にして居る。

此の如く老年期に達した地方は、準平原と名を付せられて居る。此等の各時代は其の土地に於て土地が上昇しない時は都合良く此を知る事が出來るが、土地が上昇する時は初めの谷の形とあまりに變化がなく長い間（私等の一生涯の樣に短かな時間を單位したものでない）繼續する事もあり、老年期の樣な谷の形は土地が上昇した爲め新な河川の彫刻が初まる事がある。即ち老年期の谷に幼年期の谷が刻込まれた地形である。此の事を「若返り」の地形と稱する。Ｅ圖參照ありたし。大局から見れば老年期であるけれども一局部を見れば幼年期又は青年期のものである。此地形は北海道の山地に多く見受けられる。非常に長い間上昇か續くと峽谷と稱する深い溪流が出來る。

今、もし河川の流るゝ地方の地質の構造が均一質でなく岩石に柔强あり或は斷層の樣なものがあるとすれば、河の形も從つて變つて來る。岩石の柔强による河の兩岸の形は次の樣になる此の堅い强い部分は凸起して殘る。此の形を「岩段丘」と稱する。（Ｆ圖參照）斷層や地質の構造の界を流るゝ河は構造谷と稱して居る。

今假に土地が降下すると考ふ場合に今迄の河口は海の浸入を受けて「溺れ河」と稱するものが生ずる。海が河流に浸入して來れば谷の形は今迄のものと異なつた物に化する大抵の場合には、谷底の廣い大きな谷と化するのである。而して河流が運ぶ土砂が今迄とは異なつた所に沈積する。其は　圖の如きものである。

要するに河を觀察する場合には過去において如何に流れ將來如何に變化すると言ふ所が第一である其は今迄述べた河の時代觀念と陸地の昇降の關係とを充分呑込まなければならぬ。今或る所に相當に山の奥に關はらず河の流れは非常に曲折して居るものがあると假定すれば、此の河は昔、平原を流れた時代のまゝの形を示して居る事となる。此は

河が曲折して流れつゝある時に、此の地方が漸進的に上昇した爲め今日のまゝ曲折したものである。此の曲折の事を「蛇行の切込」（Incised meander）と稱する。

河の事は此だけでは概念が入らないかも知れぬがあまり長くなるから此で止めて次は山岳及山岳の成因を述べる事とする。（未完）

ジャムプ台の説明

挿入した圖は、瑞西國のクロステルといふ町のセルフランガアにある飛躍用斜面の側面圖と、平面圖です。側面圖については A から B まで が駈け出して、この斜面の最も強い角度のところは三十五度程です。

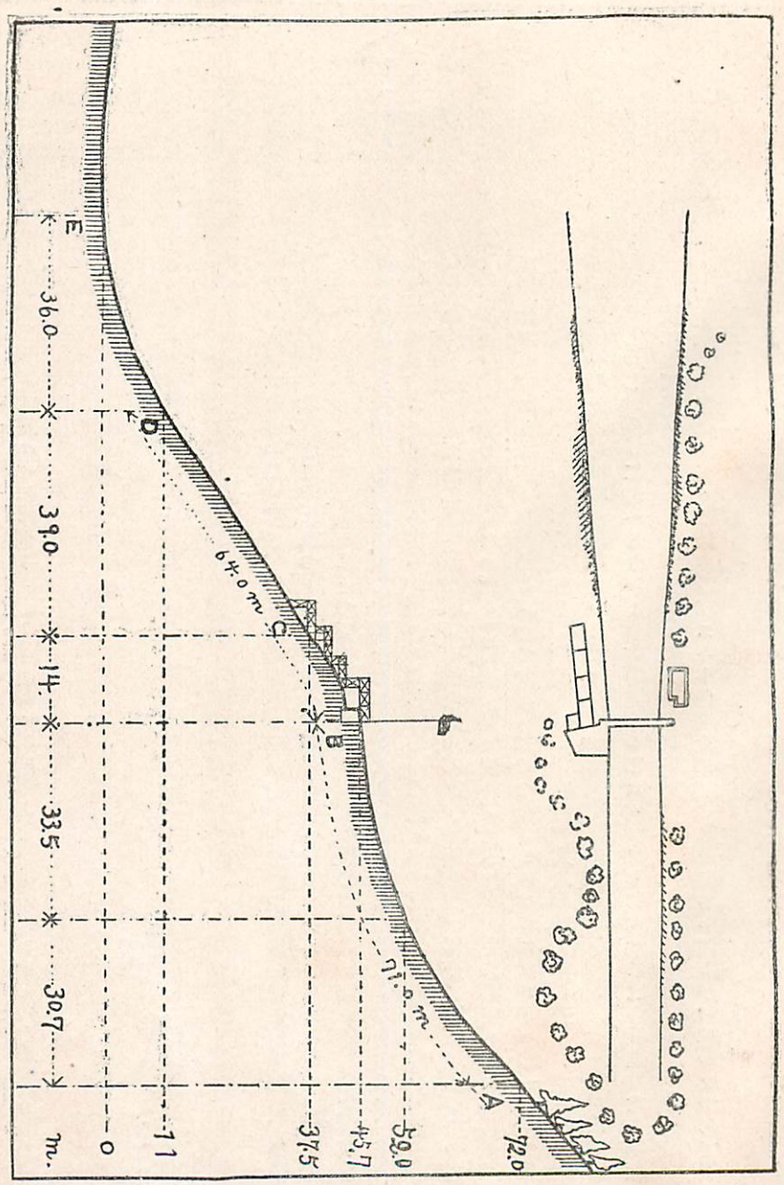
B は丁度飛臺です。飛臺の傾きは五度 B のところに高く立ててあるのは飛臺の兩側の端に、目標として立ててをく旗で普通は二本立てます。

B から C までの間にある階段の樣なのは一般の觀覽席で、着陸斜面の右側に立ててあります。此處で平面圖と對象して見ますと左側の方にはジャンプの競技參加者の席の設けてあることを知ります。

B から D までがつまり auf sprungbahn で D の附近の最も強いところが三十四度です。E から下方は auslauf

平面圖の方は特別云ふところもありませんが、中央部の飛臺の圖の向つて下方部に、變な臺がついてて居りますが、之は合圖をする人又は審判者が此處に居て auleurf の方と auf sprung の兩者の連絡をとつたり、審査したりするのです。

實際この斜面は北側か、南側か、西北か、何れか知りませんけれども、飛躍用斜面のコースの兩側に樹木を植ゑるといふことは、大へん大切なことです。



フキ夜話

□何事にも大事を取つて容易に古來の習性や態度や狀態を改めないのは英國人の國民性である。然るに此度の大戰亂は英蘭の總ての方面に大なる革新を來した

英蘭の淑女は特に彼女等のスカートに於て舊來の習慣を固守して居た。乘馬に於てもボートに於ても、又スキーに於ても然りであつた。然るに近年はスキーとを履く婦人は誰一人スカートを着ける人は無くなつた。

「世界大戰は英蘭の女流運動家特に女流スキー家からスカートを洗ひ落して終つた。そして新に輕快なズボンを彼女等の爲に殘土産した。恰も大洪水が岸の雜草を流し去つて新に豊沃な土を殘して行く樣に。」と英蘭の或る新聞に出て居た。

雪の信飛連山とスキー

板倉勝宣

人氣なき山中に、雪と、岩との山頂を、仰いで、脅すが如き風の音に耳を傾け、恐怖と寂寥と、歡喜とに挾まれつゝ峯から峯へ、谷から谷へ、ピッケルと、スキーとの跡を印しつゝ往徨はんとする人々にとつて、所謂スキー場の喧騒と、都の臭氣とは、嘔吐を催さしむるに充分である。都の臭に、醉ひしれ、他人を對手の藝當に滿足するものには、猫の額の如き、スキート場を與へるがいゝ。しかし若し死と、すれすれの自らの姿を、救手もない岩と、氷の天地に曝さねば滿足できぬ人々には、其天地が、靜かに雪に埋れて待つて居る事を、忘れてはならない。そこには、有頂天の直滑降は出來ぬにしても、恐ろしき緊張の中に、ステムボーゲンの眞隨をつかみ、氷につきさゝるアイスクリーパの一つ一つの尖端に自らの神經の通ふのを知る事が出來るのである。人は、何とでも云へ、唯一筋に山男は山へ行かねば呼吸が出來ないのだ。

しかし、靜かに考へるがいゝ。山を志すシーロイファーの前途には、數限りなき問題が横はつて居る。

殊に、信飛の山々に於ける、スキーの前途には、興味の多い問題が、解かれずして横つて居る。

今、私は、北海道に登るべき山の多きに惱んで居る。しかも信飛の山に、かくも心をひ

かれるのは、かしこに變化すべきスキー術の前途が、目に見える樣に思はれるからである。あの山に適すべきスキー術が展開される期待を、持つて居るからである。

先づ初めに、一寸考へても、如何に多くの問題があるかを調べて見たい。

氷と、岩と、雪と、雪崩と、こう並べた丈でピッケルと、ロープとが目の前に、ちらつく樣な愉快な問題ではないかそこには、冬と、春とに於ける雪の變化がある。スキーとカンヂキと、アイスクリーパとのコンビネーションがある氷と岩のコンクリートと、ロープの使用法がある。雪崩に對する注意がある。そして、積雪期に於ける、地圖の製作が必要となつて來る。例へば、地圖の上では、樂に下れそうな、谷も、其方向によつては、畫とけて、夜氷る爲に、一面の蒼氷となる谷がある。毎年必ず、雪崩れる谷や斜面がある。これらの事は、地圖に書き込まれねばならない。夜營は如何にするか。現在ある小舍を、如何に利用し、將來は、何處に、小舍をたてたらいゝか。最低、最高の溫度はどうか。何度までのスロープ（地圖上の）が大体登り得るか。スキーの長さ、及び滑走法はどう變化すべきか。例へば横滑りが、甚だ大なる役目をして、斜滑降の際にも、横滑りを多分に伴はねばならぬが如きは、明かに一つの變化と見る事が出來る。河の徒渉は如何にしたらいゝのか。かく擧げれば擧げる程、いくらでも、問題は出て來る。我等より信飛の山々に詳しい人々には、どんなに多くの胸跳る樣な問題を持つて居るか。流行を追ふて、ふわ、ふわと飛び出す人々は、頭の上を越えさして先に、やるがいゝ。後から一つ、一つ問題を解きながら彼等の居なくなつた、靜かな谷や、峰を悠くりと味ふではないか。

先づ私はあの連山の過去に於ける、シー・スプールに、ついて私の知つて居る範圍で書き出して見よう。第一のスプールは、獨塡の人々によつて、印せられた。頂上には、達しないにしても、乘鞍岳、穗高岳、燒岳、德本峠、白馬岳にスキーを踏み入れたのは、二三の外國人であつた。それに次いで日本人が德本峠を越ゑて乘鞍に行き常念岳、鎗岳、燕岳、白馬岳、立山等にスキーの跡を印して行つた。その大部分は、春の硬雪期に行つたので、私の知る中では、二月の燕岳を、唯一の例外として居る。山の兄弟には、國境もない、差別もない、理屈もない、誰が先であろうが、後になろうが、同じ心の兄弟が、新しい前途を開き、其話を靜かに、聞かして呉れたなら、我等は喜んで聞かうではないか。

乘鞍岳は、スキーの入つた度數では、隨分多い方であるが、いづれも平湯から登つたのである。元來が天候の激變する山であるから、さう容易には、頂上に、よせつけない最後の登りは、どうしてもクリーパを用ふべきであらう。荒れた際に、露營に信用の置けぬ現在では、荒れと見たら

十勝岳頂上にて　　六鹿一彦撮影

直ちに引き返せる道を取るのも、一つの方法であると思ふ其點から云へば、平湯口は、頂上近くに進む程、引返すに不利では、あるまいか。寧ろ番所原から入れば、引返しは容易であるし、好天氣の節は、悠々と、平湯へ越す事も出來ると思ふ。冬の粉雪に、あの山上の斜面を滑つて見度いものだ。鎗岳は、常念を乘越ねるのが最も得策であるが、滑りに行くよりも、將來鎌尾根を越ねて行く、一つの道筋として、考へべき所かと思ふ。これは後説する。

燕岳は雪が割に、少なかつた爲に、夏の路を登つて居る、冬の事ではあるし、スキーにとつては、いゝ路ではないが。それでも、カンヂキより遙かに樂であつたそうだ。白馬も又乘鞍と同じ位スキーの度々入つた山である。蓮華溫泉から越ねたのが最近の事と思ふ。かく過去に於て、スキーの入つた山々を、考へて見ると、それは大低、日歸りの山であるか或は、日歸りの强行をやり得る山か、さもなければ、小舍を利用して行ける山である。未だ純粹の露營を二日以上續けねば、行けぬ山へは、かゝつて居ない。

そこで一歩を踏み出さねばならない。これに適するものと、思はれるのは、針木峠越ねである。恐らくこの山を近くにもたれる人々は、定めし充分御研究の事とは思ふけれども、私にも現在の問題として、しかも近々に解かれるだろうと、思はれる、この道について、こんな遠い所から筆だけで物笑の種子を蒔かして貰ひ度い。私が、行くとすれは二月の粉雪を踏んで行きたく思ふ。先づ、立山溫泉を根據として、室堂には、充分、食料と、燃料を用意して置いて貰ふ。天氣のいゝ日に、溫泉の前の急傾斜をどうにかしてスキーとカンヂキで登つて室堂に行き、かねて夏から用意した、雪の入らぬ箇所を掘つて入り込む。翌日は、スキーとアイスクリーパで、立山へ登つて再び室堂へ泊る。天候が大丈夫と見たら翌日、立山と、淨土山の間の乘越ねへ出て、御山谷へ滑り込んで、谷が東へ廻らとする邊で、尾根を乘越ねて、中谷へころけ込んで、平の小舍に出る。こゝに、一寸した小舍を、秋の内に獵師に賴んで、雪をよける樣に、つくつて置いて貰へば、大變いゝ。うまい所へ、つくつて針葉樹の葉で圍つて貰へば、安心なものである。黑部の川を冬徒渉するのは、出來た所が、無謀な事であるから、籠の渡の針金を利用して、滑車を持參して、速席にぶらんこでもつくつて、渡る事にする。河巾は、ごうせ狹くなつて居るのだから、大した事ではあるまい。針木谷は冬の事ではあるし、雪の深さによつては非常に時間に差異があるし、優秀なるスキー隊であるか、或は二人位の、普通のロイファーであるかによつて、大いに違ふ。冬の山としては、優秀なるスキー隊でなければ無理である。とにかく針木の登りは、隨分時間を要する事と思ふ。七時に平ノ小舍を出て、二時には針ノ木峠を越えなければなるまい、大澤の小屋は使用出來るかどうか分らないが、使用出來なけ

れば、木のある所まで來て、露營をする外、仕方がない。針木の下りは下り口が、大分困るかも知れないが、雪庇の關係なども實際にあたらねば分らない。とにかく、平ノ小舍までが信頼できるならば、荒れた時は直ちに引返へせるし、天候を見合せる事も出來る。だから、立山温泉と、室堂と、平ノ小舍へ食料と、燃料とを用意して、それに大澤の小舍が、使用できるとすれば、安全なものであると思ふ。これならば鎗へ行くのと變りがないが、夏から用意せずに急に思ひたつと、すると、平小舍と、大澤とがあてにならぬから、二日は露營の覺悟が要る。獵師は平氣でやつて居る事なのだから獵師を連れて行けばいゝが、冬だとスキーとカンヂキでは大分困る事が出來そうだし、食料も防寒具も夜營となると、人夫の必要が起つて、問題は、ぐつと困難になつて來る。吹雪を考へると、露營は迂闊に、やれるものでない。空元氣か、遇然に好天氣にぶつかつて、成功しても、そんなものは、我等の欲する結果ではない。勝手に吹かして置いて、我等は確かな所をつかんで行き度いものである。いつまでも、これらの山へ行ける所に居る人々が、今に、きつと愉快な報知を聞かして呉れるだろうと思ふ。あんなに、行くべき山があるのに、スキート場に居るのは、好天氣に、家に、くすぶつて居る樣なもので、ばちが當りそうにも思はれる。さー、これからもう一つ、將來の行程について、書かして貰ふ。

鎗ヶ岳の坊主小舍の附近に小舍の出來る計畫があるからこれを冬期も利用して、其他に、双六平、鷲羽平、眞砂平及三ッ岳、傳兵衛に完全な小舍をつくる事にする。慾を云へば、笠ヶ岳の穴毛の澤の頭にも、一つあるといゝと思ふ。烏川から入つて、常念の小舍に一泊し、翌日、坊主小舍に行く。鎗澤では鎗肩から直滑降も出來れば、鎗澤の小舍まで、スラロームの練習に下りて行くのもよからう。クライミングの好きな人は、毎日でも、氷を、たゝいて居ればいいし、もつと滑りたい人は、西鎌尾根を越えて、双六平の小舍に行くがいゝ。千丈澤のスロープに誘惑されると、先が遲くなるから、我慢をしてカンヂキかクリーパで歩いてもらつて翌日は双六のスロープで滑る事は御勝手である。

他の一隊は、雪の柔い所をへづりながら、笠ヶ岳へ別れて行く。この一隊は穴毛の小舍に泊つて、穴毛の谷を滑つて、蒲田に行き、それから平湯から乘鞍へ行くとも、上高地へ出て、燒で滑ろうとも私の知つた事ではない。もし急用とあれば、左俱を下つて、直ちに、蒲田に出て貰ふ。さー、話は又、双六に居る他の一隊にうつる。彼等は双六を登つて、斜滑降をしながら蓮華にかゝる。いたる所、手頃のスロープに會つて、氣が大いにゆつたりとして來る。鷲羽平の小舍につくと、鷲羽のいゝスロープが、ひどくステンボーゲンや、スラロームを誘惑する。こゝで、滑るのに一泊しても、後悔はしない。鷲羽への登りは仲々長くて寒い

が景色がいいので我慢をすると、やがて雲の平が下の方にペッチャンコに見える。燕もいゝが鎗が馬鹿に、凄く見える。やがて間ノ池の平にきて、赤岳から黒岳への尾根と別れる所で、尾根が細くて困難に出會ふがロープをつけて、クリーパで、無事に、通過をして、眞砂平の平地滑走に入る。翌日三ツ岳に向ふと、足下は、吸ひこまれそうな、大きな急な、スロープが見えて來て、三岳の北の頭の所から緊張した、ステムボーゲンで傳兵衛小舍への澤を下りて行く。遂には、横滑りと、ストップで、身体が疲れる頃に、高瀬に出る。翌日東澤を登つて、中房川を眞直に、湯槽目がけて飛んで行く。翌朝はゆつくり寢るがいゝ。この行程に小舍が餘り多い樣であるが、何しろ尾根であるから少し荒れたら直ぐ小舍に入つてストーブでもたくがいゝ。

燃料の事は誰かゞ考へて呉れるだろう。これらの小舍の外に、彌陀原と、白馬と、乘鞍に、小舍が欲しくなるそんなに、小舍をたてるのは、山を汚すと云ふ人が多からうが現にバラックの樣な不完全な小舍もたてるのさへ防げぬ位なら、積極的に、冬も使用出來る完全なものを具合のいゝ所に、建てる樣に骨を折るがいゝ。悲憤慷慨ばかりして居るのは、弱虫のする事だ。こう書くと、如何にも、近く實現しそうだが、今の有樣では、いつの事やら、見當がつかない。何しろ、山へ入ると、爲なくても、すむ冒險をやたらに冒して、冒險小說にでも、なりそうな事を云はずに居られない時代に居ては、いつまで經つても、天狗樣の鼻ばかり延びて急なスロープ等は鼻がつかへる事になる。

山へ行く人々は、早くスキート場を棄てなければ駄目だ宿屋で樂に滑り度い人々に、吹く方も、鼻の長さも讓つて山男は、常に、ルックとロープとクリーパーとピッケルをもつて、默つて、山へ入つて行くがいゝ。吹くなら蒼氷の上で吹いて貰ひませう。ゐばるなら、吹雪の中でゐばつて貰ひませう。リリエン黨の誇は、大きな谷に畫くスラロームの雄大であり、重いルックザックを背負つて、岩と雪との急傾斜を落着いたステムボーゲンで豆の樣に小さくなつて行く姿である。氷に振ふピッケルの冴えを、誇るものが、あつちの丘、こつちの小山で、大冒險を演じては居られる筈がない。

スキーのシーズンは短い。だからと云つて、動かずに居たらいつまでたつても、猫の額をはなれられない。スキーが、遊蕩氣分に入ろうとして居る時に、眞のシーロイファーは、山を求めるに違ひない。其山は確にある。しかも現在のスキー術にとつて、甚だ困難なものである。スキー術の變化に、スノークラフトの研究に、頭をつき入れて、疊の上での大聲は、紳士方におまかせ仕樣ではないか。獵師はカンヂキをつけて、冬も、春も雪の中に寢ながら吹雪とたたかつて、毎日歩いて居るのだ。千丈澤をまくつて行く姿や蒲田から左俣を登つて、鷲羽を （以下二十四頁へ續く）

本邦に於けるスキーの團体【二】

照會事項

一、加入會員數及性質。
二、組織。支部の有無。
三、設立年月日。
四、事業。刊行物の有無。
五、事務所。（事務所にあらざるも會團の中心となり照會、通信をなし有る宛名）
六、首腦者。
七、會員の主なる滑走地。
八、主なる研究事項。技術上の傾向。
九、會員の有する記錄。
A 飛躍、（距離、年月、姓名）
B 長距離滑走（同上）
C 登山、（山名、標高、登山回數）

到着順掲載

山形縣スキー倶樂部

一、官公吏、學校教員、児童、青年團員、在鄕軍人等。十五支部に分る。

二、支部

高湯支部（山形縣南村山郡堀田村高湯）大正三年一月設立。支部長 伊藤源助

五色支部（南置賜郡山上村五色）大正三年二月。宗川清之

大石田支部（北村山郡大石田町）大正三年五月。幹事 齋藤新松

大藏鑛山支部（最上郡大藏村大藏鑛山）大正四年四月。中泉三郎

白鷹村支部（西置賜郡白鷹村役場）大正五年三月。白鷹村長

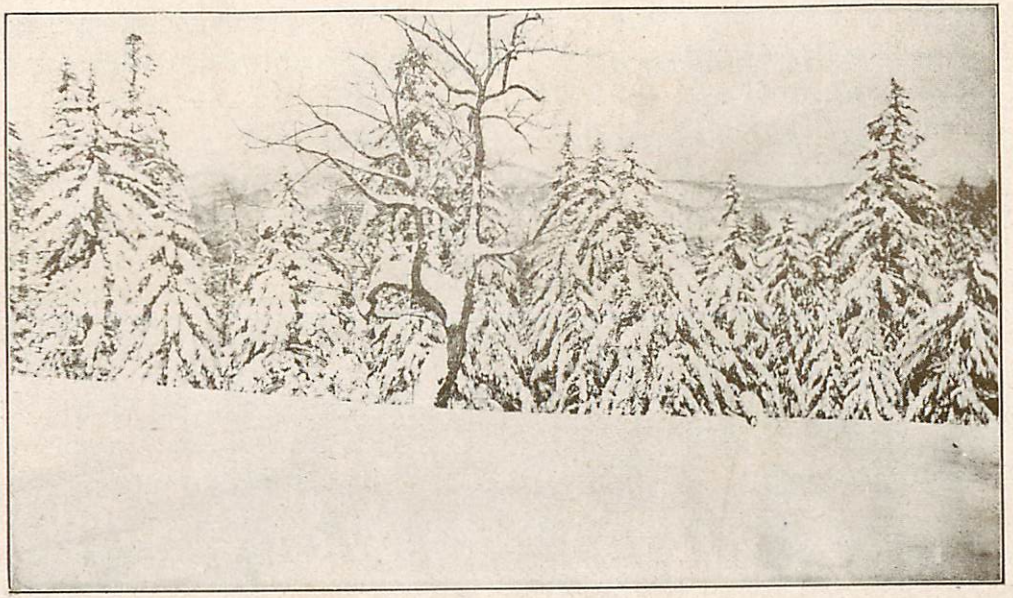
小國本村支部（同郡小國本村小學校）大正六年十二月。小國本村小林區署長

左澤町支部（西村山郡左澤町小學校）大正六年十二月。左澤町小學校長

作谷澤村支部（東村山郡作谷澤村）大正六年十二月。作谷澤村青年團長

津川村支部（西置賜郡津川村）大正七年一月。新名常次郎

屋代村支部（東置賜郡屋代村小學校）大正七年二月。屋代小學校長



雪の針葉樹林　　中野誠一撮影

赤湯町支部(同郡赤湯町小學校)大正七年十二月。赤湯町長
小杉町支部(同郡小杉町)大正八年一月。縣立農學校内、學校長
山元村支部(南村山郡山元村小學校)大正九年一月。約四十名
山元村小學校長
南小國村支部(西置賜郡南小國村)大正十年一月。約廿名。南小國小學校長
大藏村第二支部(最上郡大藏村小學校)大正十年二月。大藏小學校長
三、大正二年一月
四、冬期練習會並に競技會。講師派遣
五、山形縣師範學校内
六、歩兵第二十五旅團長

妙高スキー倶樂部

一、名譽會員二十二名。普通會員　卅六名。特別會員廿一名。支部會員　若干。官吏、會社員、學生、商人、勞働者の有志を以て組織す。
二、妙高スキー倶樂部　赤倉支部あり。
三、大正九年二月。但し大正三年二月設立せる日本スキー倶樂部妙高温泉場支部を繼承す。
五、新潟縣中頸城郡田口驛分湯加島屋旅館内妙高スキー倶樂部
同縣同郡赤倉温泉　香雲館内　妙高スキー倶樂部赤倉支部
六、會長　星野錫。常任幹事　今井廉平。支部幹事　茂原市太郎
顧問　岸義男。高橋進。
七、妙高山麓一帶。
八、スキー術基本動作を基礎とし身体各部均一運動並實用的研究

小千谷スキー倶樂部

一、百六十八名。學校教員。官吏。實業家。會社員。
三、大正七年十一月。
四、講習會。スキー術宣傳講話。競技會等。縣主催スキー講習教程(小千谷スキー倶樂部編)
五、小千谷中學校内
六、倶樂部長　高木虎槌。幹事　關環。技並重吉
七、船岡山、山本山
八、遂年向上の傾向なり。

第一高等學校旅行部スキー部

一、第一高等學校教員。卒業生。在校生及有志參加者約百名
二、第一高等學校友會に屬す。會長一名。部長一名。委員三名
三、大正六年十二月。旅行部の一事業としてスキー部を設く。
四、1.歐米のスキー參考書を購入し部員の閲覧に供し更にその譯譯を製し有志に實費を以て頒つ。日本スキー書も購入せり。
2.スキーシーズン前後にはスキー講演會を開き斯道の大家の所説を拜聽し、本部研究事項の發表等をなす。
3.時折、スキー茶話會を開き、研究の相談乃至部員の懇談をなす。
4.スキー展覧會をひらきスキー、スキー用具、スキー寫眞參考書等を陳列す。
5.十二月の休暇及三月四月の休暇を利用しスキー練習を行ふ

6.十二月より三月まで學校の休暇を利用し二三日の練習を關赤倉、押立等に行ふ。

五、東京市本郷區向岡　第一高等學校内

六、部長　教授菅沼市藏。委員　岩崎秀之。川崎芳男。濱田和雄

七、高田市。飯山町。關温泉。赤倉温泉。押立温泉(繻梯山麓)

八、1.山嶽、平地嶽の二傾向あり。前者は登山を目的とし後者は技術的方面に重きををけり。

2.本部の意向としてはスキー登山乃至スキー山岳縱走を縱横に行ひたき心掛なり。

3.尙初心者には Direct Descent に重きををけり。けだしこれスキー術の根本と考ふるを以てなり。

4.氣候及雪の關係につきて科學的研究をなす。

5.物理學教授石谷傳太郎。化學教授菅沼市藏兩氏を顧問とし理論的スキー術就中 Steering の理論につきて考究し尙スキー用油、修繕具改良を試みつゝあり。

九、旅行。飯山町—大川—沼地(九〇〇m)—万坂峠(九二五m)—赤倉温泉。大正十年一月。

C.登山、坊主山七一八m、長野縣下水内郡。大正九年一月

遠原山七七七m、長野縣下高井郡。大正九年一月

毛無山(大平峰)一〇二二m、新潟縣中頸城郡及長野縣下水内郡界。大正十年一月—以上飯山に於て—

小樽中學校スキー部

一、百五拾名。

三、明治四十四年十一月。

五、小樽中學校スキー部。

七、本校近邊及瓦斯會社裏。

八、定まりたる研究事項等なし。

九、A.四十五尺、大正九年二月八日。南波初太郎。

C.イヅチヌプリ。大正十年一月一日。今井利七。牧原鶴治。

新潟高等學校スキー部

一、約百名。本校教授及生徒

二、校友會運動部の一部

三、大正十年一月

四、部報として校友會誌に掲載

五、新潟高等學校スキー部

六、運動部長として日野月教授

七、學校附近の小丘。日曜には岩越線馬下附近。三月の休暇には赤倉にて合宿練習す。

小樽高等商業學校スキー部

一、學生約一百名

二、校友會の一部

三、大正元年

四、北海道實業團スキー驛傳競走を毎年擧行。會員の教程としてスキーの要領を印刷に付せり。

五、小樽區緑町　小樽高等商業學校内

六、部長　村瀨玄。幹事　野村愛親。高橋次郎。讃岐梅二。

七、學校附近の「緑ヶ丘」

八、畑スキーの傾向ある故、技術は鮮かさに重きを置く。從つて

平地滑走、スウイング、ジヤンプを重に研究す。

九、A.四十九尺五寸。大正十年二月於芦別、讃岐梅二。
B.旭川小樽間五十三里半。四十時間三十八分。高橋次郎（但し廳立商業學校スキー部有志と共に）
C.關島毛無山、十數回。沖里河山、一回。

慶應義塾体育會山岳部

一、約百名。部員は總て慶應義塾學生。
二、慶應義塾體育會の一部。幹事三名。部員の入部資格定めず。
三、大正四年五月。
四、大正八年より年報「登高行」を發行。
五、東京市芝區三田二丁目二番地。
六、大正拾年度幹事。大島亮吉。宮川久雄。佐々木洋之輔。
七、越後關温泉にて部員の爲め、冬春兩期に十日（十二月下旬）一週間（三月下旬）合宿、講習をなし傍ら練習す。尚、山形五色温泉にても練習す。
八、登山の爲にスキー術を研究せんとす。
九、C.白馬岳。二九三三M　山頂には到達せず。一回
藏王山最高點熊野岳　一八四〇M、一回　一切經山、一九四八M、二回
東吾妻山　一九七四M　一回
東大嶺　一九二七M　一回

＊　＊　＊　＊

●雪の信飛連山とスキー【續】

へづて、黑岳から黑部へ熊や、しゝをまくつて行く姿を考へると、誰だつて、たまらなくなる。さー、それなら、信飛の山へ入る練習はどこでしたらいゝだろうか。それには羽前の五色温泉附近の山を歩くがいゝと思ふ。あの邊には色々のスロープを得る事が出來る。やつこ、ステムボーゲンの出來る細い急な谷もあれば、雪崩の落ちる崖もある。裥森、高倉、姥湯、滑川の邊を歩けば、山はやせて谷は深い。もし直滑降を欲するなら、鉢盛山に行き、平地滑走がしたかつたら、高湯の蹇の河原行くがいゝ。やゝ長い、旅行をするなら、クリコ山も、吾妻富士も、控へて居る。唯スキート場としては、最も不適當であるのだから根本的の姿勢をつくるには、適しないが高山に行く、豫備練習にはいゝ所の樣に思はれる。この邊の山から、北青森まで、又無數の山に富んで居る。實に登るべき山の不足に苦しまずして、優秀なるシーロイファーのグルッペのないのに苦しむのである。私は信飛及びこれらの山々が、シーロイファーの來るのを待つて居る事だろうと思ふ。その報知の來る事を、遙か北の山に御待ちして居る。北の山にも又何か面白い事があつたら聞いて戴きたいと思ふ。山の兄弟なるが故に遂、遠慮なく、書き過ぎた事を、許して貰ひ度い。

スキーと附屬品

札幌南一條西五丁目

小谷運動具店

電話一五六八番　振替小樽七九六四番

大正十年十二月十五日發行　大正十年十二月十四日納本印刷

（毎月一回十五日發行）

定價一部金卅錢

編輯兼印刷者　板橋敬一

發行者　加納一郎

發行所　山と スキーの會　札幌區北三條西七丁目　振替口座小樽八四九五番

印刷所　札幌印刷株式會社　札幌區北一條西二丁目

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十年十二月十四日印刷納本
大正十年十二月十五日發行

（毎月一回十五日發行）

山ビスキー　第十號

【定價金參拾錢】